

終末伝説

渡辺広士



渡辺広士

終末伝説

新潮社版

終末伝説



著者 渡辺広士（わたなべひろし）

昭和五十三年十一月五日印刷

昭和五十三年十一月十日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 神田加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一三〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

終
末
伝
説

——核戦争の戦後状況——

死 者 数	経済再建に要する年数
2,000,000	1
5,000,000	2
10,000,000	5
20,000,000	10
40,000,000	20
80,000,000	50
160,000,000	100

生き残った者は死者を羨むだろうか？

(ハーマン・カーン『熱核戦争論』)

I

私がいまここにこうしているのを知っているのは、私ひとりだ。私には妻子も親兄弟もない。もし私の身に何事かが起きれば、会社の友人たちは気づかってくれるに違いない。しかし何事も起きなければ、私は彼らにとって、仕事の時間と飲み屋でのつき合いの時間のほかは、どこで何をしようという関係のない存在であろう。このところ私は、彼らとのつき合いを避けている。その理由を彼らが勝手に臆測して、何か噂しているかもしれないが、そうしたことは関心というほどのことではない。私が毎日、会社からまっすぐ自分のマンションに帰って、職業とはまったく無関係の仕事に没頭しているとは、誰ひとり思いもかけないだろう。

コピーライターという私の職業は、つき合いの広い職業の部類であろう。しかし、さいわいなことにそうしたつき合いでは、他人の私生活に余計な興味を抱いて立ち入ってくる者は、めったにいない。もっとも、私はいわゆる私生

活の領域の少ない人間だ。家にいる時間も少ないが（ひとり暮らしのこの三部屋のマンションに家という言葉はそぐわないのだが）、家にいても、考えることといったら広告のキャッチフレーズのほかにはない。しかしいまは違う。いま考えているのは、職業とはなんの関係もない事柄だ。私は小説めいたもの——何になるかまだ正確にはわかっていない——を書き始めようとしている。

私の同業者には、詩人もいれば小説家もいる。業界では芸術家タイプと職人タイプという分けかたがあるが、私は職人タイプだ。同人雑誌にこまめに詩か小説を発表して、広告作品にもその臭いをぶんぶんさせるといふタイプは好きなほうではない。その私が四十歳にもなって、小説めいたものを書くこうとしている。しかも、とてつもない素材について。そのことを知っているのは、私のほかには誰もいないはずだ。

そこで私は、この容易でない企てに向かって体勢を整えるために、足元を固める必要を感じている。職人タイプの私の仕事のやりかたに従って。と言っても足元固めの内容はまったく違う。いまは、まずこう自分に問うこと——私トハ何者カ？ 私ハナゼコレヲ始メヨウトシテイルノカ？ 白紙の原稿用紙を前にして。（机の上には、茶色の罫の原稿用紙の山の手前に黄色の罫の原稿用紙があって、私がいま文字を書きつけているのは、黄色罫のほうだ。これには

自己点検と作業工程を記録する。茶色野のほうは、内容それ自体つまり作品のためのものだ。

さて、二つの基本的問いに入る前の確認事項。まず、茶色野の原稿用紙に書くべき内容は、A市の事件の全容である。いまから四十年前に、一発のA爆弾で一瞬に破壊された都市の名を、私はA市という記号で呼ぶことにする。実名を用いないのは、そのあまりに強い具体性が私のペンの自由を縛ることを恐れるからだ。

次に、私はこの作業のために、特殊な環境設定をとることに決めた。会社で新しい仕事のために作業環境を変えてみるように。しかし会社の作業とはまったく異質な作業なので、環境設定もごく特殊である。まず部屋を暗くすること、外部から完全に遮断すること。私は机の前の窓に（窓はこれだけだ）カーテンを引いたうえに、映写用の暗幕をかけた。天井の蛍光灯はつけないことにする。いまは机上スタンドがついているが、これも必要に応じて消し、小さな暗闇をつくる。ついさっきまで私は暗がりて想を練っていた。イメージを模索するためには闇の中がよさそうだ、この特殊な仕事のためには。

広告のコピーを制作する時には、明るい室内でいろいろな印刷物——写真集・画集・切り抜き——を広げているのがふつうだが（幻によって幻を喚起するために）、今度はその反対をやる必要がある（真実それじたいをつかむため

に）。反対条件は以上の点にとどまらない。コピーを考える時には部屋じゅうを歩きまわったり、時には街へ出たりするが、この仕事のためには、私は自分の体をこの黒い模造皮の椅子に縛りつけることにした。見えない網で。

さらに室内の状況について。机から少し離れて、左の壁際のベッド。これは変化なし。右の壁際の本棚と背後のソファの前のテーブル。そのあたりには、四、五日前までは、商売用の本や雑誌がいっぱいだった。（コピーライターの習性で、私は本をよく買う。精神分析学・文化人類学からポルノまで。多く買うが多くを綿密に読むわけではない。それぞれの専門家に言わせれば、度しがたいアマチュアにすぎまい）それらの本・雑誌・画集のたぐいを私は昨日までに、隣りの部屋へ押しこんだり、本棚の入替えをしたりして、目につかないようにした。これまでのようにこの部屋で広告文のヘッドラインを考えたりすることはやめなければならぬ、絶対に。

レコード棚も見えないテープで封印だ。コルトレーンにしろモーツァルトにしろ、この仕事には向かない。作業は沈黙の中でおこなわれる。

こんなふうに環境整理をし、室内を昼間から（今日は春の連休の第一日だ）外部と遮断された時間・空間として設定し、私はこの個人的な仕事を進める。

これをする理由。これがもっとも重要だ。準備の段階か

ら言えば八か月前から始まっているのだが、本格的なスタートの前にもういちど足場固めをしておかなければ、この仕事は最後まで持続できないだろう。一本ごとに終わるコピー制作とは違うのだ。そこで設問——私トハ何者力？

まず私の姓がA市と同じAであるのは偶然の一致ではないということ。それは祖先から両親を経て私へと流れてきた生命の糸を父系をもって表わすというものではなく、単に私という個体のために人工的につくられたものだ。私は四十年前、A爆弾がA市に投下されたその日に、A市の一隅で一人の男に拾われた。両親も兄弟もまったく知らない。当然、本来の氏名と生年月日も。生後何か月かの嬰兒であつたのだろう。

私は（この一人称主語代名詞をなるべく使うことにしよう。テレビのコピーが「あなた」を好むのと似たようなことだ。私に対する「私」を常に明確にしておくこと）——私はA市の日と同じ日を生年月日として与えられ、姓にA市の名称を、その下の名にはこの国でもっともありふれた名を与えられた。T・Aという私の名はA市の市役所に行けば、書類記入の見本に見出されるはずだ。私の戸籍謄本には血のつながりのある者の氏名の記載はまったくない。ただ私を拾った者の氏名と、法的な名づけ親となったA市近郊の村長の氏名が記されているだけだ。

このように珍しい戸籍を持つ私を、ジャーナリズムが毎

年のA市の日に一度もネタにできなかったのを不思議に思う人もあるだろう。その原因の一つは、私自身ができるだけA市生まれということを隠して、東京生まれだと語ってきたことにある。それでも嗅ぎつけてきたジャーナリストがいままでに三人いた。そのつど私は頑固に取材を拒否した。この態度には養い親の影響もある。彼自身が旧A市民であることを隠していた。彼がジャーナリストを追い返したときの激しい言動が私の記憶に残っている。

その養い親について。彼は私の実父でないだけではなく、法律上の養父でもなかった。「養い親」と呼ぶのは、ほかの言い方を思いつかないからだ。彼は世界ノ終ワリノ焼ケ跡（と彼自身でよく言った）で私を拾って、男手ひとつで育てた。一生を男やもめで暮らした。もっとも、ときどき身のまわりの世話をしにきた女性がいた。私は彼女をオバサンと呼んでいた。彼は私が十四歳のときに死亡した。

なぜ彼は私を拾ったのか？ その理由はいまだに私にはわからない。彼があいまいにしか話してくれなかったからだ。彼は躁鬱病気質だった。ふだんは憂鬱な顔をして黙りこくっていた。しかし酒が好きで、酔うと人が変わって、はしゃいだ。相手が幼い私ひとりであっても。私に向かって、子供の理解を超えたことをよくしゃべった。その中に私のアイデンティティ（自己同一性）にかんする情報が含まれていた。

このしゃべりの内容はデータとしてより語り口として価値がある。テープレコーダーが必要な場面だ。そのおどけてはしゃいだ調子を私は写すことができないだろう。

「なあ、タロー、お前はそううちに自分が誰か知りたがるだろうが、わしにもそれはわからないだよ」と彼は言った。「わしは血と脳味噌でよごれた赤ん坊をひとり拾っただけだ、世界の終わりの焼け跡でな。もちろん、血と脳味噌はお前のものじゃないよ。あれがお前の母親だったろう。だけれど、ほんとうのことはわからん。お前はお前のその血の通った脳味噌のことだけ考えとればええ。ちつぽけな脳味噌だが、お前は馬鹿じゃない。そのうちわかるだろうが、ひとりっきりの親なし子だということは、生きていくためには、そう悪いことじゃないんだ。だから、わしを恨むなと言うんだ。お前がもしその脳味噌が邪魔になったときには、その自己意識というやつを厄介払いする方法をわしが教えてやるぞ」

わしを恨むなということと意識、ということを彼はよく言った。また幼い私がこれらを酔っ払いの冗談だと思って、彼をトーチャンと呼んだときに、彼はこんなことを言った。「なあ、タロー、はつきり言うとかげどな、ほんとにわしはお前の父親じゃないんだよ。わしがお前を養子にして、何も知らんお前にわしの姓をつけて、ホンマノ親デッセというようないえこらかげんなことを言うて育てなかつたの

は、お前が自分は親なし子だということを忘れるようにだ。ええか、タロー、よう覚えとけ。お前は太文字で書かにならんような親なし子だ。生身の親なんどよりもっともつと大きな親に棄てられた、特別の棄て子なんだ」

事実、幼いころの私は、姓が違っている、母親がいなくても、彼を父親だと信じて疑わなかった。少年時代の最初の分別がつくまでは、親なし子、棄て子という觀念を受け容れるのは楽しいことではない。しかしいまは、彼の風変わりな率直さが懐しい。

とにかく彼が一人の赤ん坊を拾って育てるといふ気紛れを起こさなかつたら、この私はまるきり存在しなかつたわけだ。自意識のないうちに死んだはずだから。考えると奇妙だ。彼がワレヲ恨ムナカレとしきりに言つた氣持がわからないでもない。

彼は私がトーチャンと呼ぶのを喜ばず、シトと呼ばせた。なんのことかよくわからなかつたが、「友だちだ。シトだ」と言っていたので、あとで考えるとフランス語のシトワイヤン（市民）なのだ。ヒトシという彼の名にひっかけてもいたろう。シトのシに死を感じたこともある。彼の異様な死ののちに。

私が十四歳の時に、シトは私をこの世に置き去りにした。四十年の人生でただ一人、ブラウン管やスクリーンの媒介なしに目の前に見た死者、屍しばね（平和な時代には、血縁者

ゼロ、扶養家族ゼロの人間が現実の死体に出会う機会は、なんと乏しいことか。映像の死体にはやたらに出会うというのに。そのとき死体を見たショックと置き去りにされたショックは、小さくなかった。その死の真相はわかっていない。深夜の盛り場で何者かに殴り殺され、ひとけのない朝の路上に、頭蓋骨を割られ顔を踏みにじられた死体となって発見された。私が見たのは警察の死体公示所に運ばれたシトだ。血は拭われ、傷口は洗われていた。ロー人形のような顔の色の記憶がある。

シトは何をしていたのか？ 彼はいつも絵を描いていた。十畳ほどの板の間は絵具とカンヴァスと画用紙で足の踏み場もなく、壁には一面に絵が掛けられていた。そのくせそれらが売れたという記憶が私にはない。おそらく一枚も売れなかったのだろう。いつも貧乏していた。金がなくなるかとクズヤオハライに出かけた。彼はKという屑屋に雇われていた。彼とKとはA市の同じ町の出身だったようだ。しかしこれも確かめたことがない。

シトの絵そのものについて。彼は何を描いていたのか？ はっきりしない。少年の私にはわからない奇妙な、形態の見えない絵ばかりだった。いくつかの色が重なりあふつかったりしただけのもの。基調は黒と赤。ほかに青、茶色、灰色、黄色があったと思う。タブローは暗く、ごてごてしていた。デッサンの方は虫が這ったような線がやたらに重

なり合っていた。それらのわけのわからない、売れもしない絵にシトは死ぬまで取りついていった。むつかしい顔をして。それらはいま地上のどこかに存在するのだろうか？ ささやかな彼の葬儀のあとに、一人の男がひとまどめにして運び去った。それから二十六年間に、私は彼の絵のことを聞いたことがない。彼が私に遺したものは、表紙のすりされた旧約聖書一冊。赤い傍線があちこちに引かれたそれは、いま私のサイド・テーブルの上にある。

以上が養い親についての総括である。彼は私の半父親であり、私は彼の影響を否定できない。

さて、シトの死後、私の人生はどうだったか？ 屑屋のK夫妻が引き取ってくれた。シトの絵の代金とかで高校に通わせてもらった。その間は、屑屋の小僧でもあった。夫妻には子供が一人いた。私より一つ年下の白痴の男児。私は早く自立したいと考え、高校を出ると新聞社のオツカイサンになって、屑屋の家を出て下宿した。夜間の大学に通った。卒業するとその新聞社の記者になることができた。

ノンキにはしていられなかったもので、ある程度の努力をした。ガリ勉もした。仕事にも競争心を起こした。新聞社時代には、半年だが海外留学もさせてもらった。やがて組合運動に首を突っこんで、妙な毘にはまり、会社を追いつかれた。三十二歳。間違っていたとは思わない。まもなく現在の勤めが見つかった。それ以来、職業生活では変化なし。

たぶん今後も。小企業だが安定している。

私的生活のほうはどうか？ 独身を通してきたのは形だけだ。同棲した女は三人。目下、四回目の独身または独棲中だが、思いの残っている女もいる。一時的な関係も数回。しかし私はいわゆるおんな好きではないだろう。結婚・家庭・子供という觀念に馴染まないだけだ。自分ひとりの戸籍は自分とともに消えてなくなるのが至当だと思ひこんできた。その心が自然に、面倒の残らない女性を嗅ぎあてて嗅覚を、私に与えてきた。私の子供はどこにも、一人もないはずだ。恨んでいる女も。

要するに、平凡な人生。処世の苦勞は他人より早くすませた。甘えたり恨んだりする心理的な歪みからは自由だった。親への反抗、つまりタライの中の反抗という真似を私はしたことがない。日常に満足している人間と不満な人間という分け方があるが、私は前者だ。現在の職業にも不満はない。能力相応に遇されていて、将来への不安はなく、他人の悪意に苦しめられることも少ないことだ。私の性格（退嬰型ではないが野心型でもない）にとって過重な荷を背負っていないと言うこともできる。

ところで、その私がなぜ、春の連休の一日を暗幕を張った部屋にこもって、A市の事件に取り組もうとしているのか？ それは一つの言葉のせいだ。去年の夏、私に起きた小さな出来事が私の内部に残した言葉。去年の七月、私は

自分がA病につかまっただと思ひこんだ。それは間違いだっ

た。
A病と私について。A病とはあの日のA市にいた者（旧A市民）に特有の病氣である。私は一方で、A病を意識しないように生きてきた。もう一方では、それを意識から完全に追いつくことはできないと知っていた。シトは旧A市民健康手帳を持っていたが、私は持っていない。（彼が私には持たせまいと考えたのだろうか？）私は頑健な体質ではないが、大病したことはない。医者にはめったに世話にならない。

A市のあの時の死者は二十数万人か？ 三十万人を超えるのか？ その後の生存者が五年後、十年後、二十年後にも、A病の不意の発病で死亡していった。その数がどれほどになるのか？ 毎年の旧A市民死亡者数がニュースになっていたのはいつごろまでか、私は知らない。目につかなくなつたのはかなり前のことだ。理由は、ニュース価値がなくなつた？ あとに残る者たちへのショックを怖れるという理由の発表があつたようにも記憶する。私は旧A市民死亡者数によるショックを自覚したことはない。自分が旧A市民の一人だという意識は弱かつた。

しかし自分の死について考えることはあつた。オ前ノ人生ハイツ終ワツテモイイノダ、始マリモハッキリシナイノダカラ、と自分に言うことがあつた。三十歳前後からだ

思う。漠然とした思考にすぎない。シトの考え方の影響があるだろう。だがいま考えると、A病への潜在不安がわずかにあって、この本気でない言葉になっていたとも言える。去年の夏の出来事は、その本気でない言葉を私の内部で爆破した。年の始めから体調が狂っていた。わずかな酒が翌朝の頭痛を、時には嘔吐を招いた。飲みもしないのに、鈍く重く持続する頭痛を感じることもあった。また目まい、息切れ、倦怠感。体内の諸器官が、臓腑や管が、かわるがわる存在の訴えを起こした。自律神経の狂いだ、気にするとノイローゼになるぞ、と私は考えた。

七月初旬のある日、社の健康診断で若い医師に「別に気にしていないんですが……」と前置きして話すと、医師は言った、「血液でしょう。血液検査をしましょう」と。(この日と翌日のことは日記に詳しく書いてあるので、それを要約する)

採血されて、そのまま気にもせずに席に戻り、化粧品の宣伝文句を考え始めた時だった。言葉とイメージの流れを断ち切るように、不意に血液という言葉が、まったく違った響きで現われたのだ。血液、そうだ、血液だ！ A病だ！ ついに始まったのだ！ せまい血管の中で、透明な丸い血球が押し合いへし合いして増殖するようすまで見えた。

それはしかし、そのまま破滅的な不安にまで成長したわ

けではない。打ち消す心が働き始めて、単なる貧血だ、食べ物への偏りのせいだと私は考えなおした。

ドラマの本番は翌日だった。やはり気にはなっていたので、私は外出先で書店に入り、重い医学書を立読みした。そのとき思わぬ確信がやってきた。私の意識した徴候のほとんどがA病の項目に書きこまれていたのだ。内部の声が改めて叫んだ。間違いない、やっぱりA病だ！ 今度は前日と違って、そのあとに空白の意識がやってきた。意識が空白になったのではない、どんな言葉も不可能にする沈黙の空白がはつきり意識された。(ほんものの死?)

初夏の光が眩しい街に出たとき、ようやく言葉が還ってきて、いましがたある持続をもつて自分の内部に起きた事態を絶望と名づけた。単なる言葉でなく、真の絶望。街のようすがすっかり変化していた。私の内部のようすも変わり、それまでとはすっかり異った思考が始まっていた。

……ソウカ、終ワリナンダナ……モウ逃ゲラレナイナンダナ……ソレニシテハ、ヒドク恐レテハイナイゾ……街ノヨウスヲ平然ト眺メテイルデハナイカ、コレマデト同ジヨウニ……叫ビ出シモシナイナ。心ノ中デ叫ブ声モ聞コエナイジヤナイカ……ソウナンダ、元ノ場所ニ戻ッタダケナンダ……ソレダケダ……元ノ場所……元ノ場所？ このように「元ノ場所」という言葉は私の内部に現われて、くり返した。

しかしほんものの死の感じ、モウ逃ゲラレナイゾという絶望はわずか一時間ほどで消えてしまった。私は社へ戻って、血液検査の結果を聞きに同じビル内の診療所に行った。若い医師は単なる貧血だと言った。「赤血球の数が減ってますね。しかし心配するほどのことはありませんよ」その言葉は私に、予期しなかった安堵感を与えた。その緩んだ心のまま、私はこう言った。「僕はA市にいたんですが……違いますか?」「ほう、ずいぶん小さい時ですね」私は黙ってうなずいた。すると相手は、「A病なんてのはねえ、昔の話ですよ。旧A市民がたくさん生存していたころには、一つの社会問題だったから、そう考えましたがねえ、いまでは症状はひとつひとつ別に考えるんです。その方が冷静に対処できるんでね、医者も患者も」

それはほんとうか? 疑いが私の心中に動いた。あれほどたくさんの人間を不意の死に奪い去ったA病が、幻だったと? 考え方の問題だと言うのか? それほどに時代は変わってしまったのか? そのとき抱いたこれらの疑問。それを私はいまだに拭い去ることができないが、この医師の言葉で私自身のA病不安が取り除かれたのも事実だ。(日記からの記述はここまでだ)

その後の成行き。右のとおり、私の絶望の体験はあつてなく終わりを告げ、私の内部世界は再び既知のものに戻った。しかし一つの謎が残った。「元の場合」というくり返

された言葉が私の中に居坐って、意識の流れをせき止める岩のように何度も姿を現わしたのだ。私は問わざるをえなかった。それは何を意味するのか、と。元の場合とは?

私がまず与えた答え——元ノ場所Ⅱ死……人間ハ虚無ヨリ出デテ虚無ニ帰ス。しかしこれでは同語反復に近い。死の予感から出てきた言葉を同じ死に結びつけてみても、充分な答えにならない。そこでもう一つの、より真実に近い答え。私は二十歳のとき、死の淵をのぞきこんで危く踏みどまったことがある。不幸だったからではない。夜間大学生のころ、哲学青年というハシカにかかった。友人の多くは政治青年だったが。具体的に言うくと、自分ノ生存ニ意味ガアルノカという問いにとりつかれて、観念的な答えを出したのだ。コノ生ハ偶然デ根拠ガナク無意味ダ、と。しかし実行には失敗した。「元の場合」という言葉は、その二十年前の死の淵の岸辺に思いがけなく立ち戻ってしまったただだと語っているのではないか、道標のない荒野をさ迷う男のように。言い換えると、不意打ちを受け止めようとした心が無意識にそうつぶやいたのだろう……これがより真実らしい答えである。

しかし内心の問答はここで終わらなかつた。ある日、また声が問うた。ホントウニ、ソレダケノコトカ? そして、その同じ声が即座に答えた。ソレダケノコトデハナイ。オ前ノミナモト、A市、ソコヲ離レテオ前ハモウ生キラレナ

イ。この声はシトの声だろうかと私は思った。その声の論理の筋道を、私はうまく説明できない。このささやきは意識下の領域から現われた。それは私に、改めて気がつきたくはなかったことを気づかせた。私は、A市から逃げて生きてきたのだ、と。

私はこれまでに、私的な旅行や仕事の出張でさまざまな地方を訪れた。しかしA市にだけは行かなかった。そこを通る鉄道に乗っても、一度も途中下車せずに通過した。ひとさらにA市を避けてきたのだ。悪い運命から逃げる人間のように、私はA市から逃げてきた。しかし運命はついには逃げる者を捕えるだろう。だから、捕まる前に自分からそこへ行くがいい。一度はA市へ行かなければならないと私はこのとき考えた。いわば回心したのだ。

だが私は出発しなかった。まだ出発していない。A市へはいまでは、朝早く出発すれば午後には到着する。しかし出発することへの無意識の障害が残っていることに、私はほとんど気がついた。A市へ行くことは、私の源の場所とは別の場所へ行くことになる可能性があるのだ。四十年後のA市に、四十年前のどんな断片が存在するのか？ 私が帰るべき場所は、私の生年月日となっているあの日の、そのままのA市。まずそこへ帰ってみなければならぬ。現在のA市へ何かを確かめに行くのは、そのあとだ。

以上が、私が自分の生年月日となっているあの日のA市

の時間と空間を、原稿用紙に書くことで再現しようと企てている理由のすべてである。この理由に説得力があるかどうかはわからない。こうしたことを過不足なく記述するということはむづかしい。とにかく私は心を決めたのだ。八か月前に思い立った。それ以来、生活を変えた。夜のつきあいを整理した。飲み仲間には、医者に酒を禁じられたということにしてある。

私はA爆体験記を探してまわった。書店で見つかるものはわずかだった。A市・A爆ものはもう売れないのだと書店主は言った。ある図書館に設けられたA爆文庫で、貸出しの便をはかってもらうことができた。かなりの量の体験記録。絵もあった。写真もあった。八か月かかって、私はそれらの情報を頭脳の記憶装置につめこんだ。ノートにとるよりは、記憶つまり忘却の暗がりに沈めること。それが再び意識の水面へ浮かび上がってくる時に、必要な、活きたイメージと言葉が得られると私は考えている。

困難はわかっている。大それた企て？ おそらくそうだ。しかしやってみるまでだ。

さて、自己点検と総括は終わった。明日から、具体的な作業に入るだろう。私はいま張切っている。

II

最初に何を見ることができるよう？ 能力にあまるほどのデータをつめこんだ私の頭脳の再現装置は、ボタンを押さなければ何も映らないスクリーンのようにだ。何から見よう？ 事件の発端、すべての始まり……私はボタンを押す。

一本の指が一つのボタンを押した。いや、まだ押していない。指が見える。私のではない。金色のうぶ毛が光っている長い指だ。そうではない。一つの手だ。長く太い異邦人の手。それがいま、たくさんの計器と切換えスイッチと丸い押ボタンが並んだ制御盤の上を……いや、制御盤の不確かなイメージは必要がない。やはり指と押ボタンだけで充分だ。一本の指がボタンを押そうとしている。そこは機械化された部屋の内部だ。A市の上空一万メートルを飛ぶ敵爆撃機の内部。そこに指だけが現われており、いま、ひとつのボタンを押した。

ようやく私の頭のなかの機械が作動する。瞬間に伝わる

信号。機体の下腹で爆弾格納庫の扉が左右に開く。大きな鉄の爪につかまれたそれが見える。爪がはずれた。それが投げ出された。空中を落下する物体。拋物線の軌跡。下界が見える……いったい、どこから誰が見ているのか？

どうやら私は脱線したようだ。これはニセのイメージに過ぎない。戦争記録映画で何度か見た、ふつうの爆弾投下の光景だ。それが落下するところを映画で見たはずはない。それは機上から撮影できるようなものではないのだ。それをほんとうに目撃した者はその下の地上にいた人間たちであり、私が自分のものとしなければならぬのは彼らの目だ。彼らが見たものは……一瞬の爆発……始まりはそこからだ、機上の指ではなく……それは爆発する……恐ろしい光！ くり返し光る。くり返し爆発する。私の頭の中で……。

くり返しはいかがわしい。ニセモノだからだ。まだそれがほんとうに見えていないのだ。どうしたらうまく行くのか？ やっかいな作業だ。私はしばらく自分の頭のなかの暗闇にたたずむ。行き詰まりを認めねばなるまい。もういちど頭を空白にして、やりなおしだ。

もう一度、私の指がボタンを押した。幻のボタンではなく、現実の黒い小さなボタンだ。すると今度はA市の上空一万メートルに敵機が一機、すべるように侵入する。私は